

公益社団法人 厚木青年会議所

2018年度 理事長

所 信

公益社団法人 厚木青年会議所

2018年度 理事長

向島 史朗

2018年度 スローガン

覚悟

【はじめに】

「我々が皆さんに求めるのと同じ水準の熱意と犠牲を、我々に求めてください。

良心の喜びを唯一の確かな報酬とし、歴史が我々の行いに正しい審判を下してくれる事を信じて、この愛する世界を導いていこうではありませんか。」

この言葉は、第35代アメリカ合衆国大統領、ジョン・F・ケネディが1961年の大統領就任演説で語った一説です。若干43歳にして大国のリーダーとなったケネディは、その言葉にこれから切り開く新時代への覚悟を込めて、集まった民衆にそして世界へ語り掛けたのです。

昭和の高度経済成長期からバブル崩壊の平成を通して、今我々が暮らす時代は大きく変化を遂げました。技術は飛躍的に進化し続け、我々の生活をより便利なものへと変え、情報の伝達速度は増し、その方法は手軽となり世界はより小さく成りました。しかしその一方、我慢が薄れ他者への思いやりは劣化し、無責任な発信がさも正論かの様にはびこり、人々は孤立し窮屈に成ってしまっていないでしょうか。そしてそれらを、時代を言い訳に諦めてはいませんか。我々青年が創り出し、推し進めて行く運動とは、いつの時も時流との戦いであったはずです。「こんな時代は間違っている！こんな世の中を、子供たちに残してはいけない！」と立ち向かった先達の覚悟が新しい時代を切り開いて来たのです。そしてその連鎖こそが今日の青年会議所の礎なのです。

【専務室】

創立から49年を迎えた今、厚木青年会議所は組織として変革期を迎えています。多様性と言う時代の流れの元に様々な価値観や見識、意見を持ち合わせた人々が入会し、青年会議所とは何か。と言う組織の在り様をより活発で建設的に議論する今、我々は改めて所属する厚木青年会議所の組織としての可能性、アイデンティティーやその仕組みを見つめ直さなければなりません。

限定された範囲でのJC活動だけでは、青年会議所が本来持つ可能性も限られてしまいます。出逢い、発見、刺激、共感に溢れる外のJC活動へと赴く機会を創出する事で、メンバーひとりひとりが活性化され、そしてそのメンバーがLOMへ集まる事で組織に新たな活力が発生し、青年会議所運動に多彩なエネルギーが産まれます。さらに発信の要と成る媒体と良好な関係を構築する事でより効果的で有用な発信方法確立し、我々が創り出す運動に更なる魅力と広がりを生じさせ、地域の人々に愛され、必要とされる開かれた青年会議所としての在り方を探求し、次世代に向けて構築してまいります。また、幾多の困難を乗り越えてきた過去と、伝統と革新が織りなす現在、可能性に富むこれから歩み出して行く未来との狭間で生じる矛盾を徹底的に追求し、守るべきものと変えるべきものをしっかり

と見極め、変化を恐れずに新時代の幕開けに即した、誰もが理解しえる論理的な組織基盤の整備を遂げる必要があります。そして多様な価値観を持つ新たな仲間が加わる反面、世代の谷間が生じ積み重ねてきた組織運営の基礎を継承していく事が困難になりつつあります。今一度全メンバーで青年会議所の運営基本と向き合い、確実に永続的に安定した組織運営のより一層の強化を図って参ります。さらに、誰もが納得のいく透明で適正な財務管理の追求は、周囲から寄せられる組織としての信頼の構築には不可欠です。活動するエリアの人々からの信頼を得られてはじめて、我々の運動が説得力を帯びて深く地域社会へ浸透していくのです。設立から公益法人格の申請を経て先達が守り続けてきた‘集団としての信頼の柱’をより強固なものとし、力強い覚悟を新たに、未来へ確実に継承しなければなりません。

【友情室】

青年会議所の魅力を語るうえで、必ず使われる常套句。「仲間づくり」。この言葉にほどされて JC の門をたたいた人は少なくないはずですが。他が為の時間に労と汗を費やすうちに、仲間が出来き、交流を通して真の友情が育まれる。世代を問わず、20歳から40歳の期間に青年会議所がもつスケールメリットを生かし育まれた友情は、メンバー一人ひとりの機会の数を増やし、青年経済人としての社会性の広がり大きく寄与するのです。そしてその本領は、JC 外の世界でも活かされ続ける、何物にも代えがたい財産となるのです。

団体として活動する上で重要なのは、そこに携わる人間の個としての資質です。まちのため、そこに住み暮らす人々のためと理想を高くかざしても、メンバー個々の存在が認められなければ崇高な理想も陳腐な戯言に過ぎません。我々が組織として発する言葉と、個々が JAYCEE として示す行動が一致してはじめて、世間が注目し、共感が生まれ信頼が構築されるのです。卒業までの在籍年数の全国平均が5年を切る現在の青年会議所において、厚木 JC は近年、残りの在籍年数を10年残す若いメンバーが多く生まれています。この非常に恵まれた環境を大切に活用し、次世代の JAYCEE 育成を確実に推し進めて行く必要が有ります。アカデミーの機会を通じて自らが所属する団体の理念を深く理解する事に努め、メンバー各々がそれぞれの JAYCEE 感を身に着ける事で社会に対する説得力を身に着けて参ります。

一度胸にバッチを付ければ行住坐臥、我々は JAYCEE で有り続けるのです。

青年会議所に所属し活動する人間として、家族や会社からの理解と応援ほど力強い後ろ盾は存在しないし、その支えは我々が地域へ相對するための覚悟の原動力と成ります。そのためには JC 活動を通じて、日ごろ身を置く世界の外に有る機会を能動的に捉え、学びを吸収し、その資質を最大限に引き出す事で個々が持つ可能性を新たな能力として具象化して行き、最も身近な「社会」である家族、会社、地域社会へ様々な形で還元すると言う事

が明快であり最短の道なのです。この活動と還元のサイクルが正しく効果的に機能した時にはじめて、「最小単位の社会」に対する最低限の義務を履行することが出来き、我々は理解と信頼を得られます。さらにその積み重ねと広がりこそが、「明るい豊かな社会の実現」へと繋がって行く第一歩と成るのです。

【修練室】

漁師は、山に木を植えます。海から遠く離れた山々を整える事で、栄養豊富な水が海に流れ出し、その結果豊かな漁場を形成するからです。これは人材を育成するという長期的な視野が必要な運動に照らし合わせることが出来ます。故郷を憂い愛し、そこに住み暮らす人々に心を寄せる事が出来る次代の人材を育成する事は、我々青年会議所の地域の未来に対する責任です。豊かな海をまちづくりに携わる人材の豊富な地域とするならば、柔軟な思考と純粹な感性を持ち合わせる幼少期の学びと体験から育まれる郷土愛を、山に植える木々に例えられるのではないのでしょうか。例え多感な成長期にその想いが薄れていったとしても、心の底に沁み込んだ故郷への愛着は流れ続け、そして地域の未来を切り開く力の源と成り、次代のまちづくり運動と言う無限の芽が息吹くための豊富な栄養と成るのです。

私が1999年に渡米した時、聞こえる街の音や吹き付ける風の香りに胸を躍らせ、目に映る全ての情景は視覚を通して脳内深くに鮮烈な刺激を走らせました。異なる文化と多様な人種が織りなす米国の地で過ごす中、自分が何者で何処から来たのか。そして、自分を形成する要素の源は一体何のかと言う事に自問する己に気が付かされました。その一瞬こそ、生まれ育った故郷を鮮烈に意識した瞬間でした。郷土への想いは相対的であり、比べる対象に出会う事でその感情に人は気づかされるのです。2019年ラグビーワールドカップ、2020年東京オリンピック・パラリンピック。これからの日本には国際の機会と言う風が絶え間なく訪れます。我々が暮らすこの県央地域にもその風が必ず届いてきます。外の世界との扉が開かれる時代がもたらす機会を有効に捉え、青年会議所が持つスケールメリットとそよぎ込む国際の風を融合させる事で、このまちに暮らす次世代が彩の異なる豊穡な文化に触れる機会を創出して参ります。そしてこども達はその屈託のない感性で自分たちが暮らす世界とは違う世界を捉えた時、夢への可能性は広がり、さらに自らが暮らす地域の魅力に気づき、郷土への想いは形成し始めるのです。やがてその想いは、溢れんばかりの郷土愛へと醸成されていきます。

【奉仕室】

青年会議所運動の立ち姿は、その芯に「まちづくり」を据えることで正中線を真っ直ぐ保つ事が出来、そして確かな歩みを一步一步と進めることが出来ます。しかしその向かう先は時として真に「まち」が必要としている事からかけ離れ、気が付けば自己満足の領域

へ陥る可能性を含んでいるのです。「JC しか無い時代」から「JC もある時代」と言われて久しい今日。「JC こそがある時代！」へと地域からの信頼をより強く引き付けるために、己の中心を知る必要があります。率先して第三者と切り結び、新鮮な見識に触れ、多様な意見も臆することなく吸収する覚悟を持ち、JC の外と中を相対的に捉えながら理想を掲げるリアリストとしての姿を追い求め青年会議所運動を推進し続けて行かなければ成らないのです。

まちづくり運動のたどり着く先とは、市民意識の変革である。と青年会議所では定義しています。我々が展開する様々な運動を通して、厚木、愛川、清川に生活圏を置く人々の意識に変革を及ぼせれば、関わる地域への関心と呼び起こすことが出来ます。関心が起きれば、地域の課題に目が留まり、その先にあるより良い社会への理想を描くことが出来ます。水面に投じた一石が創り出す波紋の様に、意識変革の連鎖を広げていくためには、一人でも多くの市町村民を運動の風に巻き込み、その声を取り入れ共に行動して行く事が重要です。永らく継続してきた事業が色褪せて行かない為にも、これから先の未来へ残して行く運動が昇華して行く為にも、青年会議所のメンバーのみがその渦の中心に居ては成らないのです。我々自身も殻を破り、広い視野を確保しながら全ての可能性を運動構築の要素として取り入れ、新時代に向かって更なる青年運動の風を巻き起こしましょう。

東日本大震災から7年がたった今日、我々の中にある防災の意識ほどの程度保たれているのでしょうか。混乱が収まり、月日が流れればあの時に痛烈に感じた現実は薄れ、その備えも身近な行いでは無くなってしまいます。人の命に直結する運動は、圧倒的な当事者意識からのみ産み出されます。そしてリアリティーを突き詰め、関係諸団体との連携をより強化し、継続して推進する事で当事者と成りうる人々の関心のレベルを保ち、日常からの備えに対する意識を習慣に結び付けて行かなければなりません。自分と、愛する人を守るために。ひいては愛するまちを守るために、今この瞬間から動き出さなければならないのです。

【会員拡大】

まちは、そこに住み暮らす人々の意識以上には発展する事は難しい。市民意識の変革を遂げるには、地域の様々な場面に JAYCEE が存在し、変革の触媒となる事が必要であると考えます。人口減少が齎す生産年齢人口の減退や、社会構造の変化を起因とする地方経済の衰退など、内外様々な事由による所属会員の減少は、全国の青年会議所が抱える最重要課題であり、その波は長らく厚木青年会議所にも打ち付けています。ピーク時の約半数と成った会員数の原因を時代を言い訳にすることなく真正面から向き合い、身を振りながらも乗り越えて行く覚悟が50周年を目前にする全メンバーに求められているのです。メンバー全員が拡大の必要性をしっかりと理解し、自らの JC 活動の中心に常に捉え行動して行

く必要が有ります。この終わりのなき挑戦にはセオリーは存在しません。これまでの幾多の挑戦をしっかりと検証し、考えうる方策は全て実行して参りましょう。そして、一人でも多くの賛同者を仲間として迎え入れようではありませんか！青年会議所運動に加わり活動する事で、己を忘れ、他が為に行動する事が細胞の隅々まで浸透した JAYCEE がまちに多く存在する事は、地域の今や未来に対する強烈な責任感を体現する人材が増えると言う事です。そんな人間が多ければ多いほど、明るく豊かな社会の実現と言う志は、理想論から現実論へドラマチックに変化して行くのです。

【あらたなる半世紀へ向けて】

1969年10月2日。日本で417番目の青年会議所として誕生した厚木青年会議所は、来る2019年、創立50周年と言う大きな節目を迎えます。「郷土の未来像を深く考えよう。」をスローガンに、社会と人間の開発を目標とし、幾多の困難をも集団力という仲間との絆で乗り越えられてこられた先達の熱き志にしっかりと思いをはせると同時に、我々現役メンバーはその責任の継承者である事を再確認し、ここから切り開く時代の荒野に、美しく力強い覚悟の花を咲かせ続けるのです。そして過去と現在と未来が高い次元で融合し、我々が歩み続ける運動の行く末を照らす灯火がその輝き保ち続けるために、持てる限りの想像力と洞察力を駆使し、愛するまちの未来像と全てのメンバーの郷里への想いを新しいスローガンに込め、さらに1年と10か月後に訪れる最大で最高の感動の瞬間を一人でも多くの方々と共に迎えるため、メンバー全員の意識を高め、誰一人傍観者と成ることなく LOM 全体で最大限の備えを整えて参ります。

OB、OG、現役の垣根を超えて、新時代の創造へ向け覚悟を共に磨いて参りましょう！

【結びに】

2004年、私は自らの意志で、厚木青年会議所の門を叩きました。それから14年。青年会議所運動に携わりながら、住暮らす郷里の変化を目の当たりにしてきました。様々な課題が今なお地域に存在し、社会の変化が新たな課題を産み出しています。それらは解決までには時間がかかり、待ち受ける試練は本物です。しかし、私は恐れてはいません。なぜなら、このまちには「JCこそがある」からです。時は移り変われども青年会議所が秘める可能性と、地域が持ちうる可能性との融合がもたらす確かな効果を、私は信じているからです。他が為を己の為とし、額に汗する仲間達を私は信じているからです。

新時代の幕開けを目前とした今、自らの使命と覚悟を新たにし、最高の仲間と共に希望の港へ向け友綱を解きます。たとえその旅路が平穏でなくとも、厚木青年会議所の航海は続いて行くのです。